琉球大学学術リポジトリ

音楽ホール・芸術・地域の動態創造に関する研究 一 佐敷町・シュガーホールを題材として一

メタデータ	言語:
	出版者: 中村透
	公開日: 2021-12-15
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 中村, 透, Nakamura, Toru
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/5387

あとがき

シュガーホールでの13年に及ぶ芸術監督の任を通して、筆者は地域社会における音楽芸術のあり方について実に多くのことを学ぶことができた。佐敷町は元来クラシック音楽の土壌をあまり持たないところであった。ホールの設置にあたって、一方に町民のコミュニティ・センターとしての歴史に根ざす期待があり、他方に行政側の未来文化の象徴とされたシュガーホールは、開館当初から芸術監督としての任にあった筆者にとっては二律背反そのものへの出発でもあったのである。しかし、このことは筆者にとって、多様な領域の音楽へと視界を広げることとなり、音楽と地域社会、音楽と人間の関係を根源的な視座から見つめ直す機会を与えられることともなった。佐敷町の歴史・文化、コミュニティの成立条件、地域の人々の日常生活を座標軸にしながら、種々の音楽事業を企画し、音楽による町づくり構想の姿勢を堅持せざるを得なかったからである。

こうした条件下での実践が、多くの場合試行錯誤の繰り返しであったことはいうまでもない。しかしこの間、ホール・スタッフ、運営審議会委員、ホールに関わった佐敷町民の熱心な態度に支えられ、佐敷の人々と志をひとつにして実践できたことには感慨深いものがある。いわばコミュニティの力が結束して、佐敷町シュガーホールの運営と事業を支えてきたというのが実感なのである。とくに、開館準備以来、席を同じくして仕事をしてきた元佐敷町教育長上原弘一氏、生涯学習課長渡名喜元久氏、ホール企画の宮城光也氏とは、佐敷の芸術文化維新同志のような友情関係を持つことができた。

シュガーホールでの実践を仲立ちとして、その後筆者は全国公共ホールの活動へ研修者、視察者として関わることになった。佐敷町にとどまらず、全国の自治体文化行政へ視界を拡大することで、地方の文化芸術施設のあり方に多くの知見を得ることができたのである。この間、筆者は作曲家としての音楽活動と音楽教育者としての仕事も並行して行ってきた。いわば文化行政サイドでの実践を続けながら、一方では芸術家としての活動を同時進行させてきたのである。この二重性はある意味で得難い体験であった。常に二つの相反する立場から、「音楽ホールは、音楽芸術の何を、どのように実践する場なのか」という問題を、筆者自身が自問自答しつづけることとなったか

らである。

元放送大学教授・お茶の水女子大学名誉教授徳丸吉彦先生との出会いが、筆者のシュガーホールにおける実践を体系的な研究へと転進させるきっかけとなった。わが国の公共文化施設の研究が、今日、文化行政、文化経済学の方法論が趨勢となっているなかで、徳丸先生は、音楽ホール・芸術・地域社会と人間の関係に視軸をおいた研究方向を教示された。それに拠って、筆者は本研究に踏み出す道筋を得ることができたのである。先生には、研究方向へのご教示ばかりでなく、海外の先行研究論文のご紹介もいただき、さらに本論文の執筆にあたって貴重なお時間を割いてご指導を頂いた。衷心より感謝申し上げたい。また、シュガーホールでの民族音楽の公演や《青少年のための舞台芸術教育》をめぐる国際フォーラムでは、元大阪大学教授山口修先生から多くの教示を頂いた。

大阪芸術大学教授の月渓恒子先生からは、本論文の作成に際しての具体的なご指導を頂き、また茨城大学教授の田中健次先生からは、論文構想の段階から貴重な助言を頂いた。また、七ツ矢博資先生(大阪芸術大学教授)、志村哲先生(大阪芸術大学准教授)には、本論文の副査をお引き受け頂いた。

佐敷町文化センター・シュガーホールからは、ホールの設置に関する行政資料、実施事業に関する資料、運営審議会の議事録等貴重な内部資料を貸し出して下さり、この場を借りて御礼申し上げたい。また、山城時正元町長、運営審議委員渡名喜明氏、津波古自治会長大城正幸氏はじめ、多くの佐敷の人々が快くインタビューに応じてくださり、資料の提供もいただいた。筆者研究室の助手、成冨真紀さんには、膨大な資料の整理を長期にわたって協力していただいた。あわせて心から感謝申しあげたい。

平成 19 年 11 月 28 日

中村 透